

シロチビコブカミキリ 六甲山にて採集

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 1 9 6)

高 橋 寿 郎

シロチビコブカミキリ *Miccolamia (Isomiccolamia) tuberculata* (Pic) は Pic 氏により京都産標本で *Pogonocherus* 属で新種記載された種である (Melang. exot.-ent. 27:10, 1918).

1933年の松下眞幸博士の大著 "Beitrag zur Kenntnis der Cerambyciden der Japanischen Reichs" (Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 34(2):157-445) の中では (p. 382), *Pogonocherus (Pityphilus) tuberculatus* Pic は Honshu (Kyoto) を原産地に分布を中央日本とされている。

1940年水戸野武夫氏は "日本産鞘翅目分類目録, Pars. 8, 天牛科" において (p. 187) *Pogonocherus tuberculatus* Pic コバネチビカミキリ, Japan (Honshu) として記録された。

松下眞幸博士は上記水戸野氏のは *Miccolamia glabricura* Bates, 1884 であるとされた (昆虫界, Vol. 11, No. 110, p. 161, 1943).

1946年に発行された関 公一氏の "新日本産天牛科目録" では (p. 106-107), *Miccolamia* 属はクワクワカミキリ *M. cleroides* (和名は原文のまま以下同), ツマキクワクワカミキリ *M. glabricura* (*Pogonocherus tuberculatus* は本種のシノニムなりとある。これは松下博士によるものであろう), チビコブカミキリ *M. verrucosa* の3種が収録されている。

大林一夫氏は1963年 *glabricura* は *Miccolamia verrucosa* Bates の morpha としてこの種をタイプに亜属 *Isomiccolamia* を設定された (Frag. Coleop. Pars. 3, p. 12). 同年の大林一夫氏による "原色昆虫大図鑑 II, 甲虫篇" (北隆館) には *M. verrucosa* の図説はあるが (pl. 157, f. 18, p. 314) *M. tubercula* に就いては何等の言及もない。

1969年の小島圭三・林 匡夫両博士による "原色日本昆虫生態図鑑 I. カミキリ編" (保育社) には *Miccolamia* 属の日本産は2種とされカクワカミキリとチビコブカミキリの2種が図説されているだけである (p. 144).

1973年の草間慶一博士の "日本産カミキリの生態と分布一覧表" (新しい昆虫採集案内, III, p. 123) の中には *M. (I.) verrucosa* はあるが *M. (I.) tuberculata* についての言及がない。

1973年中根猛彦博士は "チビコブカミキリとその仲間" と題して日本産の種に就いて図を入れ、交尾器を示されて検討をされた (北九州の昆虫 Vol. 19, No. 1:1-3, pl. 1). そしてシロチビコブカミキリ

はチビコブカミキリと問題点は残しているがやはり違うのではないかとM. (I.)tuberculata (Pic, 1918), M. (I.)verrucosa Bates, 1884, subsp. glabricula Bates, 1884の暫定的な処置をされた。

1984年の林 匡夫博士による“原色日本甲虫図鑑 (IV)”ではM.verrucosaの図説はあるが (pl. 25, f. 22, p. 124), シロチビコブカミキリについては解説のみであった。

同じ年の日本産鞘翅目学会編の“日本産カミキリ大図鑑”ではシロチビコブカミキリが美しく図説されている (pl. 80, fig. 541a, b, p. 470). これによるとこの種の分布は本州, 四国, 九州となっているが兵庫県からの記録は空白になっている。

以上が大体本種に就いての筆者所有文献による現在までの分類学的経緯である。

生態的な報告もほとんど見ることが出来なかった。僅に同属のカッコウカミキリ, チビコブカミキリに就いて“図説長野県のカミキリムシ”の中に若干の説明を見ることが出来た (1976, p. 168. 1981, p. 176-177), また最近発刊された小島圭三・中村慎吾両博士の“日本産カミキリムシ食樹目録” (1986) にもカッコウカミキリとチビコブカミキリの食樹は記録されているがシロチビコブカミキリは出ていなかった (p. 162).

兵庫県下からは今までチビコブカミキリM. (I.)verrucosa Bates の記録はあったが (県北部地域のみ) このシロチビコブカミキリの記録は全く無かった (亜属は違うが同属のカッコウカミキリも県下の記録は少ない)。

1987年5月28日六甲山最高峰近くの山陽自然歩道の脇道でタンナサワフタギを網で掬っていて2 exs. のカミキリムシが入ってきた。帰宅後大図鑑で調べて見たらシロチビコブカミキリの541a京都府産♀ (pl. 80, p. 470) に似たより白っぽいものであり色々検討して見たがシロチビカミキリに間違いないと考えられた。その後6月4日同じ場所で7 exs. 採集, 6月10日は可成り注意したが1 exs. しか得られなかった (結局10 exs. 採集. 体長は4 mmまでで一番小さいものは2.5 mmであった)。兵庫県下からの記録が見当たらない種なので今一つ同定に不安もあり6月4日採集の5 exs. を林 匡夫博士に御送りして見て頂いた。その結果再検討の余地は残っているがシロチビコブカミキリと同定しておくと言う御教示を頂いた (2 exs. 林博士保管)。そこでここに一応兵庫県下からシロチビコブカミキリを記録しておきたいと思う。

末文になり申し訳無いが同定して下さった林 匡夫博士に厚く御礼申しあげると共に採集に協力して下さいました蜂谷幸雄氏にも合せて御礼を申しあげる。

(AUG. 1987)